CEL

CULTURE, ENERGY AND LIFE

SPECIAL EDITION :
ASIAN FAMILIES AND EDUCATION

JUNE. 1997

特集 | アジアから人間を考える
アジアの家族と教育

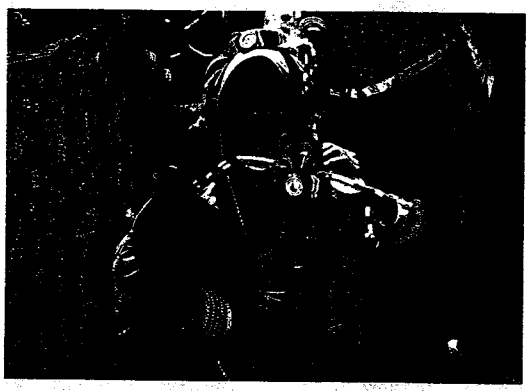
41

CEL

CULTURE, ENERGY & LIFE

VOL.41
JUNE 1997

SPECIAL EDITION
ASIAN FAMILIES
AND EDUCATION



PUBLISHER
YASUSHI SANTO
EDITOR IN CHIEF
SUSUMU FURUTACHI
SUSUMU MITA
ICHIRO TAKANASHI
ART & EDITORIAL DIRECTOR
TOSHIKI ISHIZUKA

COPYRIGHT
© 1997 OSAKA GAS CO.,LTD.
PRINTED IN JAPAN

特集　アジアから人間を考えるⅠ　アジアの家族と教育

アジアの家族の変容と子供たち	北原　淳	9
東南アジアの家族変容 －タイの家族変容を中心に－	竹内　隆夫	15
中東のスラムの人々	加納　弘勝	19
インドの結婚	堀内みどり	24
アジアの都市化と人口集中	新津　晃一	28
中国知識人の悲哀と憂慮	季　衛東	32
マリ、モロッコ、ベトナムの子どもたち	蔵前　仁一	34
アジアの教育システム －中国・フィリピン・ヴェトナムの学校	木全　清博	37
アジアの留学生 －屈辱、抵抗から新しい文化の創造へ	劉　岸偉	43
CEL対談 アジアの中の韓国と日本	筒井真樹子 山藤　泰	47
エージアン・データⅥ　アジアの豊かさへの道－鍵を握る人材の育成	高梨　一郎 編集部	54
民族と宗教のはざまでⅥ　“心の開国”というドラマ	池田　知隆	56
日本の中のアジアと西洋Ⅴ　アジアの「綱渡りの奇跡」	佐藤　光	64
日本人のアジア観Ⅰ	尹　健次	68
記紀の歴史改ざんとアジア	古館　晋	72

CEL SERIES & CEL研究プロジェクト

CELからのメッセージ	山藤　泰	84
21世紀の労働問題――岐路に立って⑤	前市岡楽正	85
なにわの物語を楽しむ方法　「近松くん!!」上演うちあけ話	栗本　智代	97
「CEL」HOME PAGEの紹介①	高梨　一郎	100
『近代日本の空間プランナーたち』第2回 八日市屋清太郎②	橋爪　紳也	105
関西の博物館 1　滋賀県立琵琶湖博物館	川那部浩哉	109
CEL美術館 36　WANG XIAOYAN	王　小燕	113
FROM EDITOR	三田　進	119

表紙写真　スリランカの小学生　© KLAUS. D. FRACKE
目次写真　インドの母娘　© YOSHIAKI NAGASHIMA
裏表紙写真　タイの学校の子どもたち　© PHOTO BANK

アジア、特に東アジアにおいて急速な経済成長とともに、家族や教育をめぐる姿は大きく変化している。韓国、中国、台湾などでは受験戦争が過熱し、その激しさはいまや日本をしのぐともいわれる。さらに情報社会化の波がアジアを覆い、多くの人々の教育レベルも著しく向上している。だが、情報化が進むことと、人々の心が開かれることは必ずしも重ならない。

アジアの人々も、日本の人々も共に幸福に生きたい、と願っている。その中で民族や宗教の多様性を超える人間のつながりはどのようにして築きあげられるのだろうか。経済的合理性、市場論理を共通原理とするだけではなく、日常的な暮らしのレベルから「友情」を育てうるのか。しかし、互いに従属したり、搾取することなく、平等に生きる関係を結ぶことのために、誰がどのように動いているのか、はあまり見えてこない。まず、異質な世界、人との出会いという「ドラマ」を通じてこそ、感動が生まれ、人々の心が開かれる、という一人の高校教師の試みからそのことを考えてみたい。

南京事件六十年

「あの南京の城壁の上で、日本と中国の高校生がいっしょになって平和のラッパを吹き鳴らすんや。六十年前、日本軍が南京に入ってきて〝バンザイ〟を叫んだあの城壁やで」。大阪府立淀川工業高校の社会科教師、金治潔さんは目を細め、いかにも愉快そうに語りだした。がらっぱちの大阪弁、というより河内弁まるだしで、相変わらず威勢がいい。

今年十二月、中国・南京で起きた大虐殺事件（昭和十二年）からちょうど六十周年になる。そこで、全国トップクラスの実力で知られる淀川工業高校ブラスバンド部を中心に友好訪中団を繰り出し、中国の若者といっしょに合同演奏しようというのである。舞台は、世界遺産として修復工事が進んでいる南京の城壁の上だ。多くの犠牲者を出した悲惨な戦争の歴史を踏まえながら、若い世代が新しい未来を築いていこうというのだから中国側も大張り切りで、いま準備を進めている。

金治さん自身、その南京事件が起きた年に生まれ、来春、いよいよ定年を迎える。早稲田大大学院で修士課程（東洋哲学）を終えたあと、同高校に勤め、それからずっとここに〝居座り〟続けた名物教師だ。高校もちょうど創立六十周年を迎えるとあって、同窓会のOBを含め、百数十人の友好交流団を編成することになった。

「どや、いい計画やろ。お前もいっしょに中国を歩かんか」と私も誘われたが、金治さんにとって大きな節目の出来事になりそうだ。だからといって、「一世一代の大一番」というような気負いはみじんも感じられない。だけど、それでもやはりうれしく

交歓会で綱引きをする若者たち

てたまらんという表情だった。

型破り教師

金治さんの中国への思いは半端じゃない。一九七六年から今年春まで実に二十二年間、毎年欠かさず、独自に全国に呼び掛けて中高校生友好交流団を編成、日本の若者たちを引率して中国を旅してきた。その旅の様子は、後で紹介するが、「河内音頭・金治一座、涙、涙の中国のドサ回り…」だ。それにしても、どうしてこんなに長く続けるエネルギーがあったのか。私もいっしょに旅し、中国を舞台にした若者たちのドラマに魅せられたが、金治さんの情熱にはただ感嘆するばかりだ。

「ここまでやれたんは、オレ個人の団で、自然体やったから。もし何らかの組織がバックにあれば、天安門事件をめぐる論争などで続かなかっただろう」。金治さんは、あっさりとそう言ってのける。

「それに、若者たちが心を開いて、成長するのは、何度見てもいいもんや。青春はすばらしい。甲子園の監督をやめられないのと、同じよ」

ドンキホーテの夢

そもそものきっかけは、文化大革命の嵐が吹き荒れていた一九六七年と一九六八年の二回、日本教師友好訪中団の一員として中国に行ったことから。村山富市・元首相も大分県の県会議員として参加していた第一回目の訪中で、上海で世話してくれた中国の紅衛兵の女性にすっかりほれこんでしまった。「とても素直で、感じがよかった。日本の若者たちとなんとか引き合わせて、交流させたい、という気持ちにかられてしまった」。金治さんも二十歳になったばかりのころだ。

それから、たった一人で、日中の厚い壁にぶつかり続けた。

一九七二年に日中国交が回復した。それ以来、東京の中国大使館や大阪の総領事館にたびたび足を運んでは、中国への熱い思いを語った。当時、日中間に確かに熱っぽいムードはあったが、一般の渡航はまだ難かしく、日本人への対応もまだ官僚的だった。だが、しげしげと通っては、長広舌をふるい、「招待状を出してくれ」とまくしたてた。

「国家レベルの問題は政治家にまかせても、友好交流は民衆の間で一人でも多くの友人をつくることや。ごく普通の高校生がありのままの姿で交流するのが大切なんや」

総領事館の人たちは「先生、またあの話ですか」

世界遺産になった南京城壁

と、彼が現れるたびに笑いだすほどだったそうだ。それまでに二度、中国へ行ったことがある、というだけのつながりしかない。一介の高校教師がいくら熱弁をふるっても北京には取り次いでくれず、まさにドンキホーテだった。

一時、その外交ルートではダメだと見切りをつけて、香港の宝石商たちの旅行団にもぐりこんだこともある。香港にある中国国際旅行社に飛び込み、「中国のビザをだしてほしい」と交渉もした。最終的に、「ためでもともと」と知り合いの旅行社の人に北京政府に直接、届けてもらった交流計画書が決め手になった。夢は九年目にして現実になった。

戦争と若者

第一回目の訪中団は、一九七六年の夏だった。その夏の終わりに毛沢東が亡くなり、当時はまだ文化大革命の嵐の最中だった。だが、その日本の若者による訪中団は、服装も髪型も生徒の自由で、優等生もいれば、ツッパリもいる自由奔放で、破天荒な集団だった。まして素足を露出させたホットパンツ姿の日本の女子高校生が中国の街中を歩くのだから、接待にあたった中国の担当者は息をのみ、びっくりしたようだ。

訪問先は上海、蘇州、無錫、鎮江、そして南京というコース。かつて日本軍が侵攻した道筋でもある。受け入れ側の公式的な行事などはできるだけ断って、「学校に訪問できなければ、ストライキをしたる」と金治さんは居直り、学校での交歓会を実現させた。

最終目的地の南京では、人民烈士の墓がある雨花台に向かった。「先生、そんなのやめてください。まだどんなことが起きるかわかりませんよ」と大反対する中国側を強引に振り切って、南京の人々がけげんな表情で見守る中、金治さんは生徒たちとその墓に花輪をささげた。

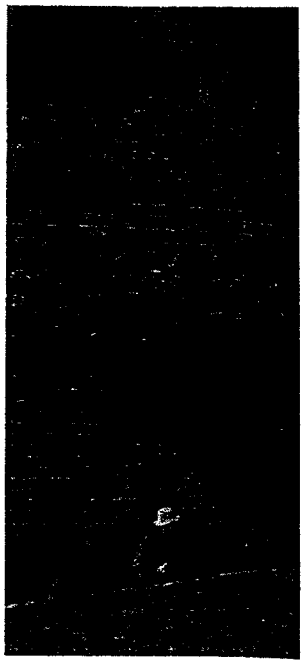
そして、生徒たちは中国の人から戦争の話を聞いた。日本が中国を戦場とした事実はやはり直視しなくてはならない。それまで戦争のことにはほとんどふれず、行き届いた世話をしてくれている中国の人たちに、そんな辛い歴史があったことを知り、生徒たちは多くのことを学んだようだ。

旅の最後の夜、ホテルの一室で生徒たちが主催してお別れパーティーを開いた。通訳、旅行社の人たち、ホテルの服務員さん、南京で知り合った中国の高校生たちを招待した。ジュースとお茶、お菓子くらいしかないが、パーティーは次第に盛り上がった。二週間の異様な体験の疲れ、別れの感傷、そんなものが一気に噴き出し、涙と握手と抱擁が頂点に達した。そんな生徒たちの交歓風景を見ながら、金治さんも中国の人たちも肩をたたきあいながら、喜んだ。「これでいいんや。これでいいんや」

翌年の第二次訪中団が雨花台に行ったときには、群衆の間から石が飛んできた。それでも、そのコースをたどる旅は続けた。「とにかく一回だけでも行けば、それでいい」という気持ちで始めたその旅も、行くたびに、「来年も必ず来てくれますね。約束ですよ」と中国の人たちの声を背に帰国することになった。

「教育の場」としての交流

最初のうちはまだ高校生対象の訪中団は珍しかったが、やがて学校単位、あるいはスポーツ団体や公



南京、雨花台にある革命烈士墓

的な団体が組織されるようになった。そこで第七次ぐらいからは、「友好交流」という使命感よりもむしろ、日本の学校からハズレがちな生徒の教育の場に変わっていった。

まず、団員は金治さんの個人的なつながりで集められる。全国にいる友人の高校教師たちにそれぞれの学校で生徒に呼びかけてもらった。団のOBによる口コミの効果も大きい。おちこぼれ大歓迎で、学校も進学校から職業高校といろいろ。やがて大学生から中学生、そして障害を持つ生徒も集まってきた。毎回二十人くらいの編成を目標にしているものの、いつも締め切り時点での応募者は数人で、「今年はダメか」とあきらめようとした寸前に不思議と最少人数に達した。

「金治一座」の旅はだいたい次のような経過をたどる。旅の期間は春休みの二、三週間だ。

応募してきた生徒たちは、出発の前日、大阪で合宿する。金治さんはいう。

「広大な中国を理解することは、とてもできない。ただこの旅を通して、誰か一人でもいい、友達を作って帰ろうじゃないか。自分と同じ人間が住んでいる。それが分かれば十分だし、誰かを好きになることがどんなにすばらしいことか、それを味わってみよう」と。

生徒たちはお互いにほとんど知らないから、その表情は固い。東京の有名私立高校生もいれば、大阪のツッパリもいる。いつしか学校は偏差値で分けられ、他の高校との間の交流はほとんどなくなっているが、ここではどこの生徒もいっしょにされる。服装は一切、おかまいなし。学校の制服をきちんと着たものもいれば、染めた髪にパーマで現れるものもいる。

「われわれは平凡な人間なのだ。とすれば、平凡な中国の人々と仲良くできるはず。ありのままの自分をさらけだすこと、そして心の底から相手にぶつかっていこうじゃないか。青年の情熱と素直さが、民族と言語の壁を乗り越えるたったひとつの武器なんだ」

私も何度か、旅の前夜の合宿に顔をだしたが、この段階では、いくら金治さんが力んでも、生徒にはあまりピンとこないようだ。しかし、全国から見送りに集まった「一座」のOBたちが中国での〝演し物〟についてアドバイスをしたり、いっしょに歌の練習をするなかで、生徒たちの緊張が少しずつほぐれていく。

旅の初めには、「一座」の中で気のあったグループができ、バスでの席の位置が自ずと決まる。どのグループにもなかなか入り込めない生徒や、逆に勝ち気で、なにかにつけてリーダーシップをとろうとする子もいる。そうした生徒一人一人の性格を金治さんはじっと観察する。

中国側が交流の相手と指定してくる学校は、都市での超一流校。交歓会では、楽器にしても、声楽にしても、玄人はだしの、選りすぐられた生徒を次々と繰りだしてくる。一方の「金治一座」のメンバーはバラバラで、ハチャメチャな集団だ。たまにはギターを弾ける生徒もいるが、多くは何の芸もない子たちだ。

最初のうちの〝演し物〟は、生徒たちで「河内音頭」を踊ることだった。ラジカセに合わせて、みんな輪になり、踊る。「まさに、河内音頭・金治一座」だった。金治さんは悠然と構えて、「ええか、心が通じりゃ、それでええんじゃ。一生懸命にやれ」と励ます。ヘタはヘタなりに、それは中国の人たちに

結構受ける。ついには、相手側も踊りの輪に引き込んでしまう。

人が感動するのは、玄人はだしのうまさではない。一生懸命にやっている若者たちの熱気にこそ人は心を動かされる。その熱い心のときめきに、つい拍手を送りたくなるのだ。その拍手に若者たちも自信を取り戻し、元気になる。そんな心のドラマチックな動きを金治さんは十分に知っている。

ドラマと治療と

そして五日目ぐらいになると、団員の間にさまざまな病状が現れ始める。熱を出したり、腹痛を起こしたり、精神的にも、異様にはしゃいだ後、逆に落ち込んだりしてくる子。「一座」から浮きあがり、ハズレそうになる子もいる。

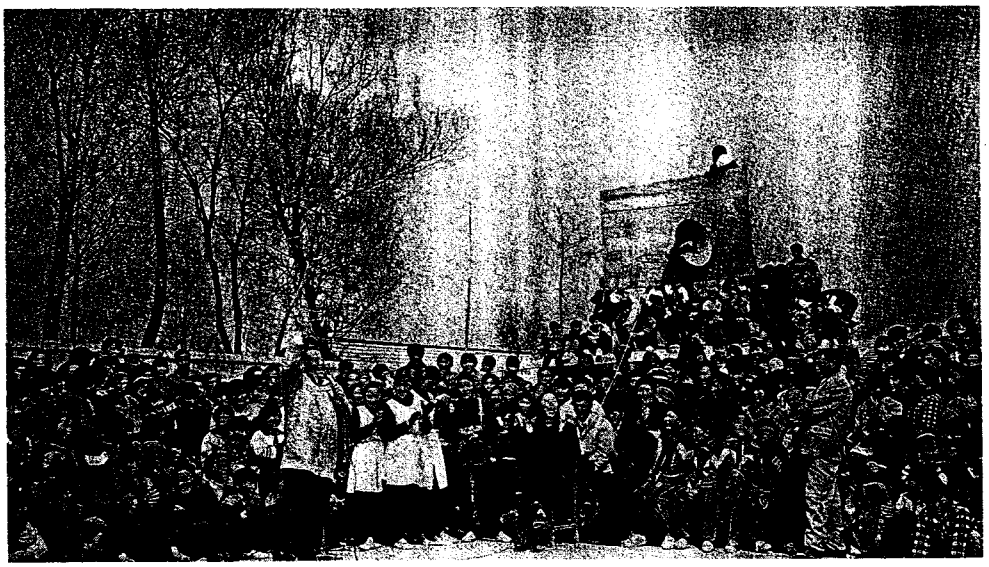
「さあ、そろそろ毒が出始めたぞ」

金治さんは、そうやって「治療」にとりかかる。漢方医の免状をもっている彼は、薬を飲ませ、ハリを打ち、あんま、マッサージまでする。そうやって自分の部屋に一人一人を呼んで、あれこれと相談にのる。わがままが出はじめている生徒には、厳しい調子でしかる。

「わがままな子は、そのわがままを出させ尽くして、手を打っていけばいい」

集団の中での疲れ、心の中で生じるさまざまな葛藤。そんな危機に陥った団員の状態を見つめながら、援助の手を差し伸べる。すると、団員たちは素直な気持ちを表現し、生き生きとしてくる。

そんな旅の山場は、旅行者がまだ訪れることの少ない土地の学校での、徹底した「交歓」だ。純真な中国の生徒たちの心に触れ、交流の火花を散らすことだ。最初の訪問コースだった上海から蘇州、無錫、鎮江、南京の地は、日本人観光客も増え、友好団そのものが珍しくなくなった。「金治一座」の足は自ずと戦後、日本人が踏みいれたことのない地域を漂流するようになった。



中国江蘇省徐州郊外の農村の中学校で歌う金治さん

ありのままの姿で

例えば、一九八四年に訪れた江蘇省連雲港市では、次のような光景が繰り広げられた。

戦後初めて、日本の高校生がくるというので、市長自らが指揮して接待にあたった。金治一座は十二人。それに対して中国側は、通訳五人、新聞記者、カメラマン、説明員、英語の教師など十一人が接待員にあてられ、カメラマンは市の写真家協会長、説明員は歴史博物館の館長というものものしさ。交歓会として公園に全市の中学生を集めた集会を開くというので、「大規模な集会よりも、少数の生徒たちと長時間交流したほうが実りが多いのではないか」と金治さんは計画を変更させた。「小さな火花も広野を焼き尽くす、ということわざもあるじゃないか」

しかし、「一座」に同行していた新聞記者はつい、こう言ったそうだ。

「金治さん、連雲港市の人々は、バスから降りた生徒たちを見たら、ガッカリするのではないかなあ」

そう言うのも無理もなかった。だんだん、団員には日本の学校から落ちこぼれがちな生徒たちが増えていた。「服装も髪の毛も自由、人間にはそれぞれの表現スタイルがあるのだから、それを認めるのが先決だ。彼らの屈折した心のうちには、大人の及ば

ない情熱がひそんでいる」というのが、「金治一座」のモットーだった。とはいえ、日本の若者の姿を見慣れていない中国の人たちにとって、団員たちが奇異に映るのも当然だった。

結局、連雲港市内にある花果山（西遊記で孫悟空が生まれたとされるところ）にハイキングに行くことになった。「われわれはお客さまになってはいけない」。金治さんはその前夜、生徒たちに語りかけた。「言葉がしゃべれなければ、日本語でいいんだ。人間だから、相手の顔の表情や態度で理解すればいい。ともかく、やってみよう」と。

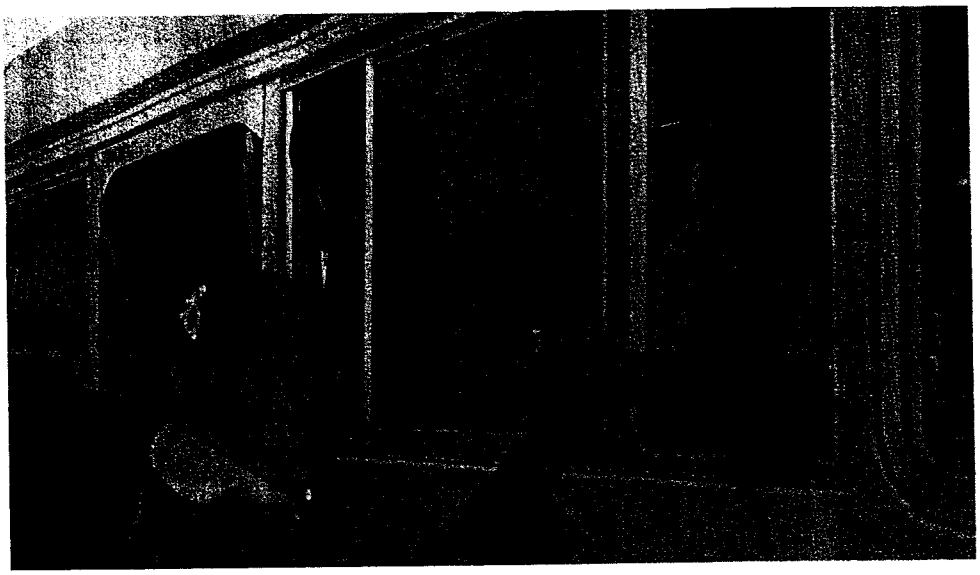
山道をのぼりながら、生徒たちは手帳にお互いの名前を書きあって、自己紹介していた。自然と下手な英語か、日本語と身振りで話をし、やがて笑い声がおきた。身振りがおもしろいからだ。日本の団員たちは、中国の生徒数人を相手にしなくてはならないから、大変で、絶えず話しかけていた。少し疲れ、話がとぎれると、団員が「鉄腕アトム」を歌いだした。活発なメロディーに、たちまち中国の生徒も中国語でそれに合わせた。

そして一休みしたところで、団員たちは「鉄腕アトム」に振り付けをして、踊りだした。いつの間にか、通訳たちも、教師たちもいっしょに踊りの輪に入った。もちろん「河内音頭」も飛び出した。

夕方、市内の新浦公園で桜の記念植樹。毎年、桜の咲く頃に、この高校生訪中団を迎えたいとの願いをこめて桜にしたそうだ。それを聞いて、団員たちが突然言った。

「先生、僕たちはこの桜の木が大きくなるように応援したいのです」

そして、彼らは樹の前に整列した。男の子は、「ワッショイ!!　ワッショイ!!」と応援の型をした。女の子は、それに合わせた手をたたいた。どの子も真剣だった。声をお腹の底から絞りだして、力の限りの応援だった。桜の樹を記念植樹したうれしさ、それを計画してくれた人々の好意への感謝の気持ちがあふれていた。見慣れぬ日本独特の応援のスタイルと、その意味を知ると、中国の人も大いに喜び、握手してまわった。



別れを惜しむ日中の高校生たち

翌日、連雲港の新浦駅のプラットホームでは、見送りにきた地元の生徒、教師、市関係者と別れを惜しむ団員たちで、収拾がつかないほどの状態におちいった。肩を組み、手を取り合ってカメラに向かう者、文通の約束をしている者、身につけているものを記念品として交換しているもの。

汽車が入ってくると、一瞬、重苦しい雰囲気になりだした。突然、団員のひとりが「四季の歌」を歌いだした。それぞれの言葉で、心のうちを歌に託した。汽車に乗り込んでからも、車中から、ホームから歌声が絶間なく続いた。走り出した汽車を追って、中国の生徒たちはホームを走った。どの子も歌いながら、泣いていた。そんなにも人を好きになれる自分を発見し、その喜びにあふれた涙だった。

「どうや、生きてるって、すばらしいやろ」という金治さんも、涙をこらえきれなかったそうだ。

大阪の空港に降りたった生徒たちは晴れ晴れした顔になっている。「みんな、いい顔をしているぞ」。金治さんは生徒たちの顔を見渡しながら満足そうだ。髪を染め、パーマをしていた子がいつの間にか、髪を切ったりしている。旅が終わったあと、初めて「一座」についてきた教師が言った。「こんな旅行ってあるのだろうか。後半の八日間、毎日毎日生徒たちが泣いていた。おかげで、こっちも涙をこらえるのが必死でしたよ」

金治さんがいう「河内音頭一座、涙、涙の中国旅行!」は、こういうことだ。

場の力

九一年春の十六次訪中団には、全盲の女生徒も加わった。中学校のバレーボールの交流で、全盲の香織さん（当時十九歳）＝大阪府立高校定時制＝をめぐる光景が、金治さんは忘れられない。

「目の見えない私が参加してもかまへんの、という香織をだすと、ボールが手にあたった瞬間、顔色がぱあっと変わった。〝先生、こんなの初めて。おもしろいわ〟と喜んでいた。その後、書道で見事に〝平和〟という字を書き、中国の子供たちを感動させた。一生懸命やって心が通じれば、人間は変わっていく」

「自分のいい面、悪い面がよくわかり、とても楽しかった」と香織さんは振り返り、大阪府立高校教諭、桝谷佳彦さんも「香織は、ツエをついていたので顔をいつも下に向けていたけど、段々と顔をあげ、先頭に立って踊るようになり、最後にはツエを隠してしまった。これまで何度も参加したが、みんなまるで〝使用前・使用後〟みたいに表情がいきいきしてくる」と感慨深げに語っていた。桝谷さんは、第一次訪中団の参加者だ。

そんな「金治一座」の姿を見ていると、一時はやった「自己開発セミナー」の中国版、と言えなくもない。そして大人になるためのイニシエーション（通過儀礼）の役割も果たしている。異文化としての中国との出会いや、言葉の壁を乗り越えた心の交流を通して、学校生活では味わえないドラマを体験した若者たち。異文化とのぶつかりあいを通してこそ若者はエネルギーを爆発させ、心も開いていった。中国、ひいてはアジアは若者たちが心を開く「舞台」、もしくは「劇場」にもなっている。

「金治一座」のOBはすでに四百人を超えている。その後、団員たちは教職、福祉、会社勤務などさまざまな仕事につき、それぞれの「自分」の旅を続けている。ドラマと治療、そして友情。そうしたものが教育の中心にあると金治さんに教えられた。

子供たちと綱引きをする金治さん（中央）

逆境からの「開国」

教育のことについて長く語りすぎたが、日本国内でも家族をめぐっての「開国」も進行している。かつてアジアの旅といえば、日本からアジアに行く一方通行の関係だったが、いつしかたくさんの人がアジアから日本に訪れるようになった。結婚難に悩む過疎地の男性の相手として、アジアから多くの花嫁がやってきてからもう十年も過ぎた。その間に生まれた子どもたちも大きくなり、地域社会の懐の深さが問われてきている。

山形県朝日町がフィリピンから花嫁を迎える斡旋を始めたのが一九八五年。写真などで相手を絞り、二週間ほどの現地訪問の間に集団見合いから結婚式まですませるやり方が各地の農村で行われた。しかし、「経済格差を背景にした人身売買」との批判もでて、やがて行政は撤退。その代わりに斡旋業者が前面にでてきて、いまでは「国際結婚」は山形県内で千組を超え、最上地方では毎年、十人前後の「二世」が小学校に入学しているという。

義父母との同居、子育てなど異郷の暮らしの中で、懸命に生きるアジアからきた女性たち。文部省の委嘱で国際日本語普及協会が行った調査による

と、その女性たちは「若・知・専」、つまり、若くて教育レベルが高く、専門職の経験者が多いそうだ(九七年五月一三日日経夕刊)。

その調査対象となった花嫁は、新潟県上越地域の中国、韓国、フィリピン、タイ、スリランカの人と福島県東和町のフィリピン人。結婚年齢は上越の場合、二十代後半が半数近くを占め、夫側が(四十五歳から四十九歳)と約二十歳の開きがある。日本語学習に熱心な女性が対象のため、必ずしも全体像を反映してはいないが、大学卒が相当数含まれ、小学校教師、看護婦、秘書などをして働いていた人もいた。

彼女たちにとって異郷暮らしの救いは子どもたちの成長だ。「子どもにはなんとしても十分に教育を受けさせたい」と願いながら、子ども自身の「異質さ」によるいじめと遭遇している。しかし、それらの問題も、彼女たちの持ち前の知的レベルの高さや、適応能力の高さで乗り越えているという。その人たちの心のドラマに思いをはせ、どのように温かく受け止めていけるのか。心の「開国」の実践は地方からも徐々に広がっている。

いまでは台湾でも、ベトナム人花嫁がブームだそうである。台湾の農村でも深刻な嫁不足で、結婚斡旋業者の窓口には、台湾男性のお見合いの順番待ちが長蛇の列をなしている。アジアの国々の大きな経済格差が一つの圧力になって、アジアの人々の移動が続く。だれもが幸福になりたいのは当然のことである。

「子どもを救え…」

アジアへの接近の仕方はいろいろある。家族や教育をめぐってそのことを考えるとき、民衆をつなぐ心の「開国」を抜きに語れない。人間が人間として生きるとはどういうことなのか。同時代を生きる人間の間の友情をどうやって保ちうるのか。単なる物的な援助ではなく、自らの心を開くことこそ求められるように思える。

よく「いい学校」、「いい会社」ということが言われ、そのことへの志向はどんな人間にも、どこの社会にもある。だけど、そのことに憧れるあまりに、「よくない学校」、「よくない会社」との見方が知らずに身に付いてしまう。さらには「よくない仕事」としての農業には嫁がこないとか、「よくない学校」をでていると、「よくない人間」として見られがちである、と。ひいては「よくない学校」、「よくない会社」と見下ろす視点が「よくない国」というように発展途上国に対する蔑視にもつながりかねない。

人間はやはり平等で、どこの国の人々とも仲良くして生きていく、という視点で交流していくことは意外と難しい問題である。日本人と中国人、日本人とアジア人が同じ人間であるという立場にたつにはまず、豊かな人情をもつ「新しい日本人」になることが求められているのかもしれない。それは、国際化という大波のなかで、宗教や民族への感覚が薄い日本人が、異文化との「ドラマ」を体験し、どこまで心の「開国」をはかるかにかかっている。そうすることで、共感能力を高め、なによりも元気を取り戻したい、と思う。あらためて中国の作家、魯迅のことばを思い出す。

「人間を食ったことのない子どもは、まだいるかしらん。子どもを救え…」　(狂人日記)

(毎日新聞大阪本社学芸部副部長)

学校に教材費を寄付して感謝状を受け取る金治さん(中央)